

吉福西遺跡発掘調査 地元説明会資料

主催：太子町教育委員会 文化推進課 文化財係
協力：太子町上下水道事業所、安西工業株式会社

はじめに

太子町上下水道事業所の施設である吉福水源地の整備事業に伴い、太子町教育委員会による埋蔵文化財の確認調査を行ったところ、多数の遺構や遺物が見つかったため、発掘調査を実施しています。

本説明会では、今回の発掘調査で明らかになった遺跡の様子をご紹介します。

主な調査成果

調査の結果、調査地内で人の生活していた面（遺構面）が複数見つかりました。（図1）

江戸時代	水路跡 1本
中世(鎌倉時代～)	畑と川の跡…第1遺構面
平安時代	建物と土器を使った祭りの跡 …第2遺構面
古墳～飛鳥時代	土器だまり

以下、くわしく調査した遺構面（第1遺構面、第2遺構面）について説明します。

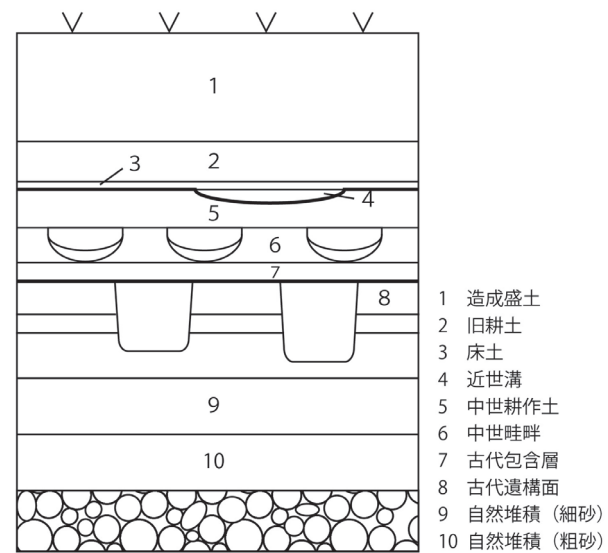


図1 土層の模式図（西側の壁面より）

○第1遺構面～中世の耕作地

吉福水源地を建てる際の厚い造成盛土層の下には近世の溝があり、さらにその下層から格子状に入り組んだ溝と川の跡、小さな柱穴が見つかりました（写真1、図3）。

溝は南西にむかって傾斜していました。また溝の1本は川の跡に向かい、柱穴が溝を囲むように掘られていました。こうした格子状の溝は耕作の跡と考えられ、溝の幅や間隔が狭く小さいことから、ここは畑だった可能性があります。川の跡に接するように見つかった柱穴は、水を引くためのなんらかの施設だったのかもしれない。

遺構に伴う遺物は多くありませんが、土器や耕作跡の構造から、中世（鎌倉時代）以降のものと考えられます。



写真1 第1遺構面（北から）

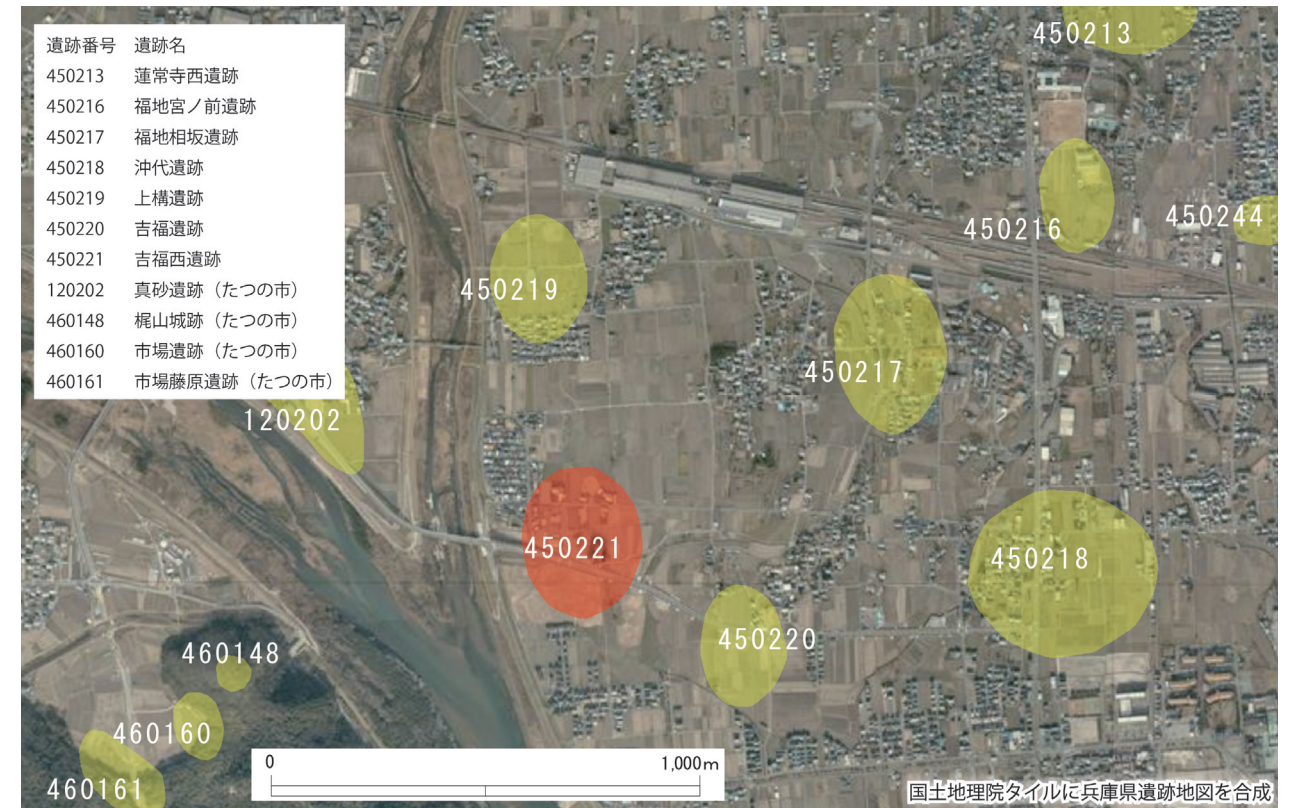


図2 調査地の立地と周辺の遺跡



図3 調査区の平面図（第1遺構面）

○第2遺構面～古代の掘立柱建物と土器埋納遺構

中世の耕作地の下層から1区と2区において、柱穴跡が多数見つかりました（写真2）。このうち1区の柱穴群は、桁行2間以上、梁行2間の建物（掘立柱建物）で、柱穴は直径50～60cm前後、深さは70cm近くにまで達する大きなものでした（写真3）。

2区の柱穴は方向の異なる2組の柱穴の列になり、1区の建物以外にも複数の建物があったと考えられます。柱穴からは須恵器や土師器の細片が出土しており、古代（飛鳥～平安時代）のものと判断されます。



写真2 第2遺構面（南から）



写真3 掘立柱建物の大きさと柱穴の深さ

最も注目すべきは、4区で検出された土器埋納遺構です。4区と3区は近世から現代にかけて大きく削られていたため、上層の遺構を検出できませんでしたが、土器を埋納した下層の遺構は、奇跡的にほぼ当時のまま検出することができました。

遺構は上層から地盤まで深く掘り込んだ土坑であったと思われます。土坑の底は約1m四方の隅丸方形をしていました。

遺構の中央に須恵器の壺を置き、蓋をするように須恵器の杯をかぶせていました。その周囲には円礫が数個ずつ、3方向にまとまって置かれていました（写真4）。もともとは西側にも円礫があり、東西南北に円礫が置かれていたと思われます。さらに、須恵器の壺と円礫は無造作に置かれたのではなく、丁寧かつ複雑な手順で据え置かれたことが分かりました（写真5、図4）。遺構の年代は平安時代のものと考えられます。



写真4 土器埋納遺構(写真の上が北)



写真5 土器埋納遺構の断面の状況

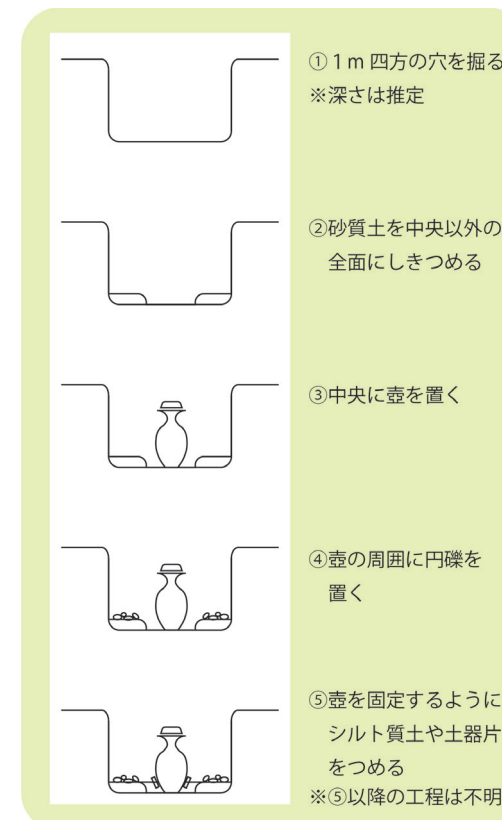


図4 土器埋納の手順（想定）

これは特殊な遺構で、なんらかの祭りを行ったと考えられます。では、いったいなんのための祭りを行ったのでしょうか？

現時点で考えられるのは、以下の2つです。

①掘立柱建物を建てる際の祭り

現代でも大きな工事をする際、「地鎮祭」を行います。土器埋納遺構のすぐそばには、掘立柱建物があります。この2つの遺構には共通点があり、セットとしてとらえた場合、「建物を建てる際の地鎮祭」と解釈できます。

②条里の設定に伴う祭り

太子町には、古代から中世にかけて設定された「条里」の痕跡が良好に残っています。条里とは土地区画の制度のことで、碁盤の目のように水田を区画したものを行います。こうした条里の境界線や設定の基準点とみられる位置などに土器や銭などを埋納する例があり、ここに近接して条里の交差点が存在することから、土器埋納遺構と条里とが関係する可能性もあります。

上記2つは仮説ですが、いずれもこの土地の開発に深くかかわる祭りであった可能性は高いと考えられます。

まとめ

調査成果から、調査地は以下のように変化したと考えられます。

弥生時代中期（約2200年前）：人間が生産・生活を開始。この地で稲作が行われていた。

古墳時代後期（約1500年前）：周辺で人々が生活。土器の廃棄を行っていた。

古代（約1200～1100年前）：掘立柱建物や土器埋納遺構が作られる。集落の中心部？

中世（約900年前）：小川とそれを利用した導水施設をもつ畑からなる耕作地が作られる。

江戸時代（約400年前）：東西に延びる溝。以後近現代まで、水田として利用。

とても狭い調査区にもかかわらず、多くの遺構や遺物が出土したこと、それらの検討から調査地の変遷が明らかになったことは大きな成果です。

平成20年度にこの周辺で行われた発掘調査では、中世の区画溝や建物跡、土壌墓などが検出されています。過去の調査成果と今回の調査成果を総合的に検討することで、吉福西遺跡とその周辺の歴史を復元できることでしょう。

今後の調査と成果の発信について

今回の調査で、吉福西遺跡の土地利用がどのように移り変わったかを考える手掛かりを数多く得ることができました。今後は、出土した遺構や遺物の検討を進め、展示や刊行物の出版などの情報発信を行うとともに、太子町内の遺跡の調査や保護・活用に役立てていきます。